

報告：2018年度鳴門教育大学小学校英語教育センター主催シンポジウム

鳴門教育大学小学校英語教育センターでは、毎年10月に、そのときそのときの小学校英語教育に関わるテーマを設定し、シンポジウムを開催してきました。2018年度のシンポジウムは10月13日（土曜日）の午後に徳島市内のシビックセンターホールにて開催され、103名の参加者がありました。2017年3月に告示された新学習指導要領のもと、小学校中学年において外国語活動が、高学年において教科としての外国語が、2020年度には全面実施されるという背景をふまえて、「新学習指導要領を踏まえた小学校外国語教育のあり方」をテーマに、登壇者から、その具体的な方向性や、事前に準備すべきことや解決すべき課題等についてお話いただき、ご参会の先生方と一緒に共有することを主旨としました。

本シンポジウムの基調講演として、文部科学省の直山木綿子先生に「新小学校学習指導要領における外国語教育のあり方を見据えて、今、取り組みたいこと」と題して、お話しいただきました。直山先生は、small talkの実演からはじまり、次期学習指導要領の施行に備え、「言語活動を通して」の意味の理解、小中高連携の一層の促進、教師の英語力の向上の必要性について、そのポイントを示されました。詳細については、本誌に掲載の巻頭原稿をご一読ください。

続いて、新学習指導要領を念頭においた先駆的な取り組みについて、パネルディスカッション形式で、直山先生をコーディネータに2つの実践報告が行われました（以下の2つの実践報告に関わる記述は、発表者より提出された発表の概要を加筆・修正したものです）。

まず、福井県勝山市に位置する成器南小学校の北川宇子先生と北郷小学校の平林育美先生より「児童の「伝えたい」「話したい」を実現するために教師が意識していること」という題目のもと福井県勝山市の取組みが報告されました。同市では、限られた語彙や表現の中で、児童が「伝えたいこと」「話したいこと」を英語で表現し合う授業を実現するにはどうしたらよいかという課題を設定し、それを解決するために「外国語による（領域ごとの）言語活動を通してコミュニケーションの素地（基礎）となる資質・能力を育成する授業」の実現を重視し、「外国語教育強化地域拠点事業」の指定を機に、2014年度から言語活動を中心に据えた抜本的な授業改善に取り組まれています。同市小学校教員が授業を改善する過程で学ばれた「従来の授業との違い」「目指す授業の実現のために心掛けること」について、児童や教師の変容とあわせてご報告いただきました。

次に、徳島県美馬市の江原北小学校の小角総志先生により「新学習指導要領本格実施に向けた美馬市の外国語教育」という題目のもと、徳島県美馬市の取組みが報告されました。同市では、2017年度より教育委員会に外国語教育指導監を置き、その指導のもとで市内の外国語教育の充実が図られています。それまでALTに大きく頼ってきた教師の意識を変革し、2020年度の新学習指導要領全面実施に向け外国語教育をいっそう充実させるため、同市全体で足並みをそろえた取組みがなされています。2018年度からは、アルファベットや聞くことに関する指導を工夫し、指導内容の充実を図るとともに、すべての小学校で教育委員会が提供する単元計画案・活動案にもとづく授業を行い、授業に関する市全体での共通理解や教師の負担軽減を実現されています。

その後、パネリストとフロアとのあいだの質疑応答を通して活発な議論が行われました。

最後に、本シンポジウムに登壇いただいた先生方をはじめ、ご参会の先生方に、お忙しい中、新しい小学校外国語教育について、ともに理解を深め、また、課題を共有していただいたことに、この場を借りて、心より感謝の意を表します。ありがとうございました。

（山森 直人）